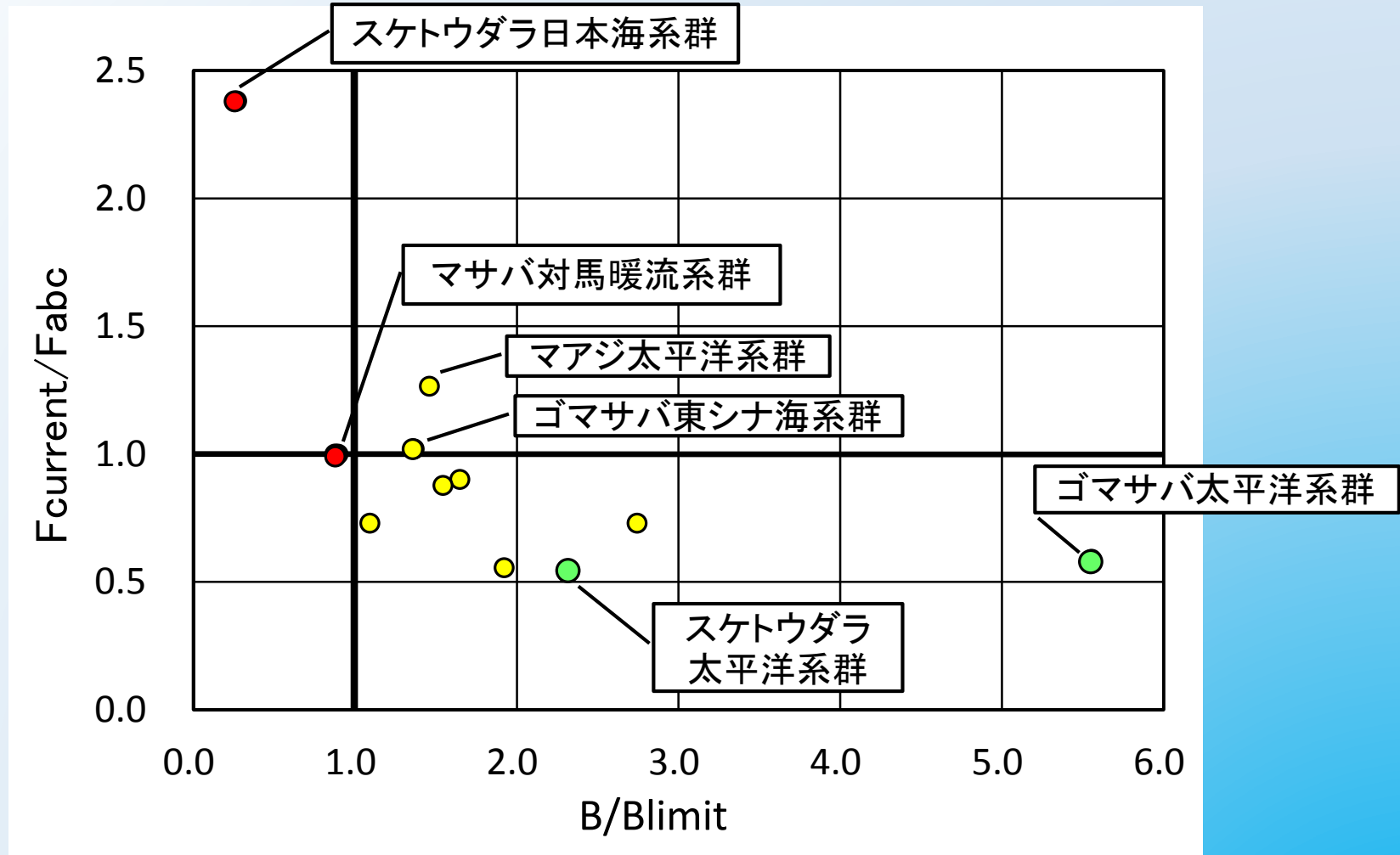


我が国TAC対象種の資源状況(2015年)

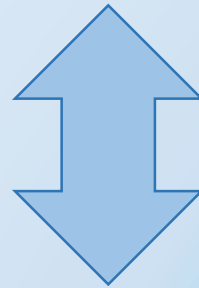


目標親魚量基準(持続漁獲量が最大となる親魚資源量=SSB_{M_{SY}})を試算すると、SSB(2015)/SSB_{M_{SY}} ≥ 1はゴマサバ太平洋系群、スケトウダラ太平洋系群の2系群 ●

国際的な資源管理の概念と仕組み

・地域漁業管理機関(RFMO)による管理

科学委員会: 資源・漁業の現状把握(資源評価)・動向
予測・管理オプション検討



長期戦略 目標設定(いつまでに
回復させるか)

本委員会: 管理目標の採択
漁業管理・保存管理措置、国別漁獲割り当て
等の採択

北太平洋クロマグロの管理戦略

次期回復目標:

2034年までに60%以上の確率で「初期資源量の20% (約13万トン)」まで資源を回復させる

長期管理方策:

資源評価の結果、「暫定回復目標※」の達成確率が

(A)60%を下回る→管理措置を強化

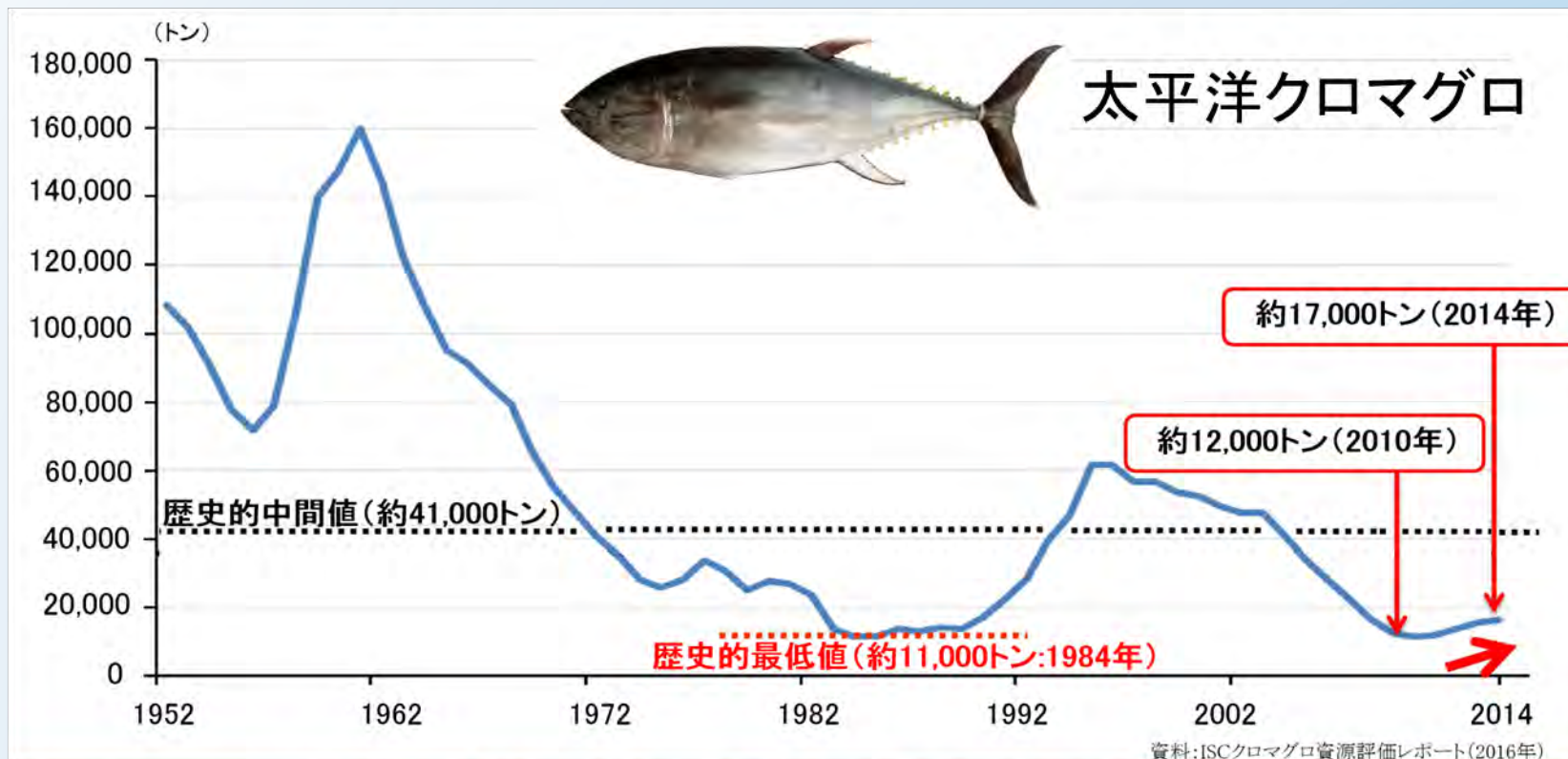
(B)75%を上回る→一定の範囲で増枠を検討

※: 親魚資源量を2024年までに少なくとも60%の確率で、歴史的中間値 (約4万1千トン)まで回復させる



WCPFC(ISC)による資源評価の結果(2016年)

親魚量は、近年やや回復するも、2014年時点で約17千トンと推定、依然として過去最低水準(約11千トン)付近にある



資源回復に向けた取り組み(国内・国外)

加入量の早期把握、小型魚の漁獲管理、長期管理目標が課題



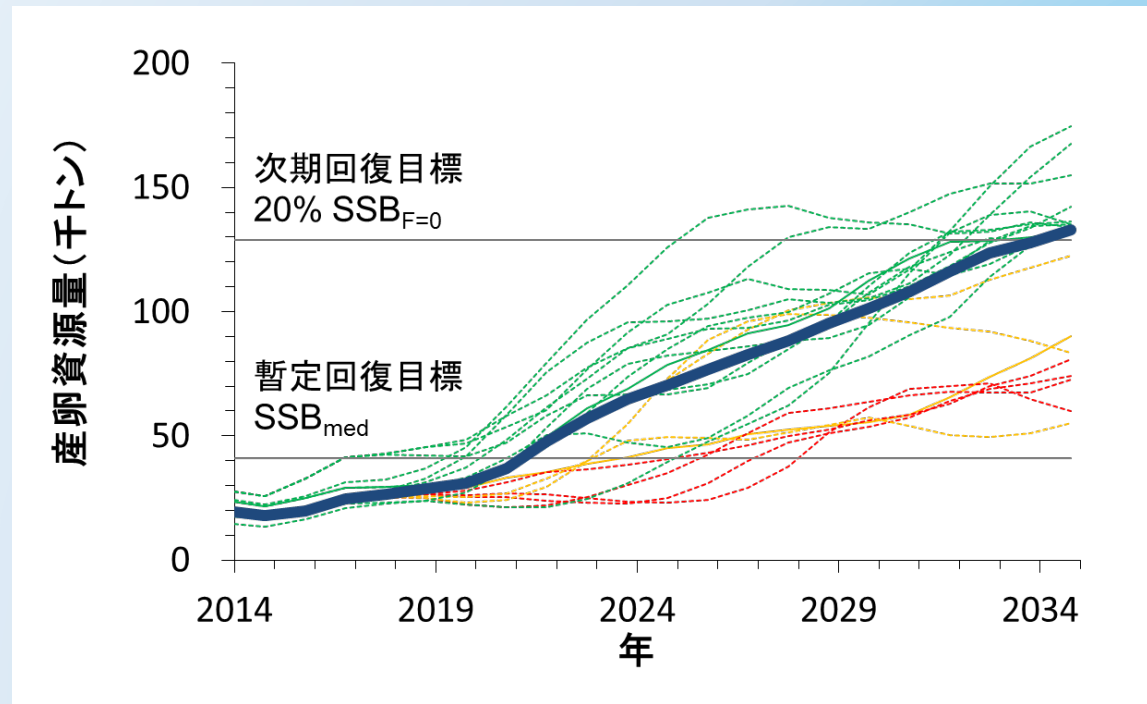
WCPFC北小委員会で合意された管理目標と資源管理方策 (2017年)

■ 今後、資源評価の結果に応じて管理措置(漁獲上限)を調整

目標への回復確率が...

60%を下回れば「管理強化」

75%を上回れば「増枠の可能性を検討」



我が国水産資源管理における 目標資源水準設定の必要性

再生産関係データが使用可能な32系群で試算
「持続漁獲量が最大となる親魚資源量＝SSB_{MSY}」未満の親魚資源量(2015年)
は28系群→資源管理により資源増加の可能性

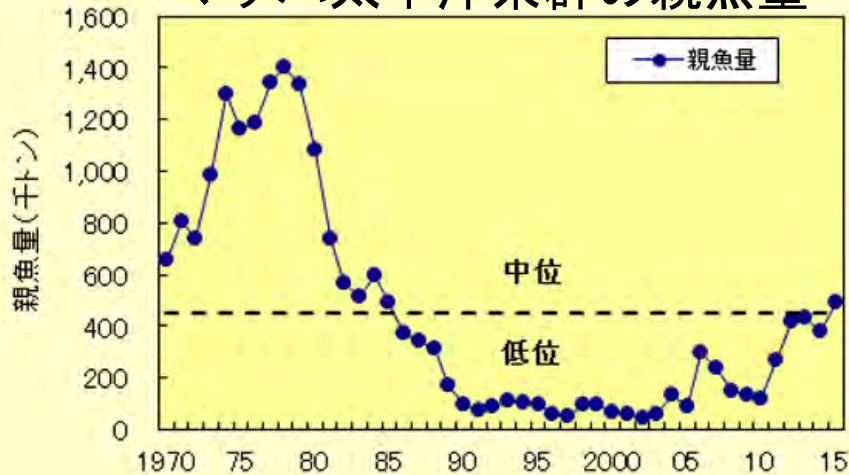
平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マサバ
学名 *Scomber japonicus*
系群名 太平洋系群
担当水研 中央水産研究所



マサバ太平洋系群の親魚量



現状:親魚資源量の回復基準(Blimit)を上回った場合の目指す目標資源水準がない。

(マサバ太平洋系群は2015年にBlimitを上回ったが、現状維持の管理基準。)



今後:「持続漁獲量が最大となる親魚資源量＝SSB_{MSY}」を示し、目標資源量設定により、Blimitを上回った水産資源をさらに有効利用する管理目標が得られる。

今後の課題

(資源の詳細な把握と温暖化等環境変化への対応)

① 調査の拡充

- ・現状：現存量調査、海洋環境調査
- 改善：漁獲加入量調査、公海域での外国船による漁獲物把握など
- ・北部太平洋海域全体での情報収集強化
- ・沿岸漁業に関する情報収集強化

② 妥当な資源回復・管理計画作成のための漁業者との対話の強化

③ その他

- ・衛星情報の活用による操業実態の解明
- ・各国の漁獲量の推定

養殖魚種の効率性の比較

魚種	種苗の由来	生育期間	餌	増肉係数	価格 (円/kg)
ブリ	ほぼ天然 (人工種苗は5%程度)	18～36ヶ月	生餌と配合飼料の使用比率は 5:5	2.8	800～1,000
クロマグロ	ほぼ天然 (人工種苗は8%程度)	3～5年	生餌が主流	14～15* ¹	2,800～3,000
大西洋サケ (ノルウェー)	人工	24～40ヶ月 (うち10～16ヶ月は淡水)	配合飼料	1.2	1,100～1,300
パンガシウス (東南アジア)	・天然 ・人工(ベトナムからの輸入種苗が多い) (カンボジア、インドネシア)	・8～12ヶ月 (カンボジア) ・5～6ヶ月 (インドネシア)	・配合飼料、多くは生餌+米ぬか (カンボジア) ・煮餌(米ぬか、魚粉、キャッサバ、廃鶏) (インドネシア)	0.5* ²	400* ³

注:*1,*2.増肉係数は配合飼料。ただし、クロマグロは生餌、パンガシウスは1kgの生産に用いる飼料中の魚が0.5kg以下(イオンのASC認証基準)。

*3 販売価格からの推定